

中部の

エネルギーを 築いた

人々

電気事業に邁進、
電源開発に貢献した **三田 民雄**

(その1 - 松永安左工門に随行し欧米諸国の電気事業を視察)

1951(昭和26)年5月、松永安左工門の民営、発送変配電一貫経営の構想が反映された電気事業再編成令の実施に伴い9電力会社の一つとして中部電力株式会社が発足し、井上五郎が社長に就任した。まず、新会社の経営基盤を確立する必要があり、「電源の増強とサービスの改善とにより公共の福祉増進に寄与する」ことを強調した。

発足時の日本経済は、昭和25年に起きた朝鮮動乱を契機として本格的な立ち直りを見せ、戦前水準(昭和9~11年ごろ)を超えるまでになっていた。こうした経済の復興に伴い電力需要が増大し、緊急の課題は電源開発を進め需給を安定させることであった。そこで発足後ただちに「電源開発本部」を設置し基本計画を策定した。

1955(昭和30)年以後、神武景気(1955~1957年)、岩戸景気(1959~1961年)という高度経済成長時代に入り、さらなる電源開発が求められた。そこで1956(昭和31)年末、「需給の均衡」「サービスの向上」「収支の安定」という三大方針を盛り込んだ経営基本方針が策定された。

こうした状況の下、水力開発の重点はベース電源としての大容量貯水池式発電所(大井川水系の井川、奥泉発電所など)から、出力調整用の大規模揚水式発電所(大井川水系の畑薙第一、第二発電所)の開発へと移行した。

この井川開発にあたっては、全国で初めての試みとして建設補償の3原則(①道路敷設(井川~静岡間)、②新しい井川村造り、③民生安定)による補償が行われ、その後、電源開発のモデルとなったことが特筆される。

火力は新鋭火力石油発電所として三重火力、新名古屋火力発電所、さらにコンビナート方式を採用した四日市火力、尾鷲三田火力発電所が相次いで建設された。

今月号から、1954(昭和29)年に取締役役に就任(建設部長、企画部長を委嘱)してから、電源開発の実務に一貫して取り組んできた三田民雄の人物と功績を

その1 - 松永安左工門に随行した欧米諸国電気事業視察記

その2 - 大井川水系の総合開発

その3 - 新鋭大容量火力発電所の建設

に分けて紹介する。



三田 民雄

1906(明治39)~1965(昭和40)

1 生い立ち

三田民雄は1906(明治39)年に千三郎の4男として和歌山市で生まれた。

地元の和歌山一中、第一高等学校から東京

帝国大学電気工学科を卒業した。その秀才を物語るものは、紀州徳川家の奨学資金、三菱岩崎家の奨学金を受けたことである。

そして大学卒業の前年、三河水力越戸発電所の工事現場へ実習に行った。そこで出会ったのが井上五郎電気課長であり、彼から直接指導を受けた。ここから井上、三田のつながりが始まったのである。

世の中が不景気な時代の1930（昭和5）年に大学を卒業、彼一人だけが東邦電力に採用された。その後、中部配電を経て新電力体制発足の1951（昭和26）年に中部電力理事、給電部長に就任、昭和29年に48歳の若さで取締役（建設部長、企画部長を委嘱）に就任した。

「参考」三河水力電気(株)越戸発電所

1924(大正13)年、東邦電力(株)と名古屋財界とが協力して資本金100万円(東邦電力系の早川電力が大半を出資)で設立された発電会社であった。初代社長に神野金之助が就任し、その他名古屋財界の錚々たるメンバーが重役人に名を連ねた。

事業内容は矢作川中流の越戸に7,500kWのダム式発電所を建設した。当時、東京を舞台に東邦電力系の東京電力と従来からの東京電燈が需要家争奪戦を繰り広げており、元の計画は、発電力増強の一方策として早川電力を通して東京方面に供給する予定であったが、実際には名古屋、岡崎方面への送電となった。

越戸発電所は、1927(昭和2)年に工事着



中部電力越戸発電所



三水湖の碑

工、井上五郎が電気主任技術者の責任者となり昭和4年に完工、送電を開始した。発電所設備は国産で、発電機は芝浦製作所製(5,000kvAX2台)、水車は電業社製(5,370kW X 2台)であった。

ダム湖は矢作川、カ石川、御船川の3つの川が合流することから「三水湖」と名付けられ、周辺は勘八峡と呼ばれる景勝地である。

2 松永安左工門に随行し欧米視察

1954(昭和29)年に取締役就任後の秋、9月22日から12月12日まで当時の電力中央研究所理事長・松永安左工門に随行して欧米を視察した。ここに幅広い分野で欧米見たままの視察記を紹介する。

(1) スケジュール

- ① 9月22日ー羽田から英国のロンドンに滞在
- ② 10月6日ーロンドンからスウェーデンのストックホルム
- ③ ドイツースイスーイタリア(ローマ、フロレンス)ーフランス(パリ、シェルブール)
- ④ シェルブールから世界一の客船クイー

ン・エリザベス号でアメリカのニューヨークへ(11月8日)ーロスアンゼルス(12月1日)ーハワイ・ホノルル

⑤ 12月12日ーホノルルから羽田

(2) 自動車運転で各国の国情、気質を見る

- ① イギリスー田舎道などゆったり走り、奥ゆかしさを感じる
- ② ドイツー全部がフォルクスワーゲン車で70~80kmで規則正しく走る
- ③ アメリカー大型の量産車でお互いが競走して走る感じ

(3) 米国文化

ニューヨーク、ハドソン川の橋、サンフランシスコのゴールデンゲートなど橋の文化だ

と感じる。高速道路なども資材や資金が豊富で高速道路なども橋で建設する。

(4) 各国の電源開発

- ①欧州各国—重要産業としてとらえ、あらゆる産業より優先して電源開発を進めている。
- ②アメリカ—100万kW単位の大きなものを作っており、大きすぎて日本の比較にはならない。あらゆるものに最優先して電力開発すれば、すべての産業が興る。仮に余っても構わない、もし余ってもチャレンジする新しい産業、その電力を

使う工業が必ず出てくるという考えで開発している。



視察後の帰朝報告会(昭和29年12月15日)

3 人物像——大井川にかけた労苦と喜びの句碑

三田民雄は電気技術者らしい鋭敏な感覚を持ち、幅広い識見、明るい性格、円満な人格を備えた人である。その姿を趣味からその一端をみてみたい。

(1) スキー、野球、ゴルフなど多才なスポーツマン

スポーツマンで野球、野球観戦、ゴルフなどに熱中した。またスキーが好きで尻もちをついた写真が残されていた。(写真の裏に中部配電時代の25年1月と鉛筆で書かれている。)



尻もちをついたスキーの写真

(2) 囲碁4段の腕前

休日になると自宅碁盤で棋譜を並べ、また



地下職員クラブでの対局

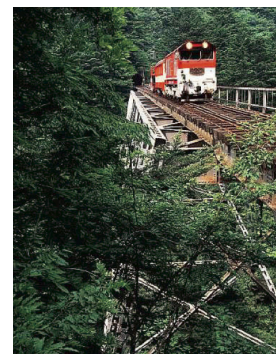
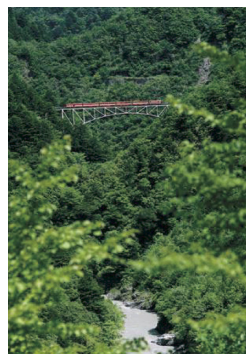
会社の職員クラブで同僚と対局したりして楽しんで。

(3) 大井川にかけた労苦と喜びを唄った句碑「虹能橋 かけし緑の 関の沢」

「三恩」の俳号をもち日頃から俳句をたしなんだ。この句碑は、大井川鉄道井川線関の沢鉄橋、千頭側の山裾に1mほどの自然石でできている。大井川専用鉄道の建設によって



関の沢に鉄橋をかけた労苦と喜びで、橋のかなたに日本の電力の未来を唄い、1954(昭和29)年10月、奥泉、井川発電所建設スタート時点で造られたものである。



大井川鉄道井川線関の沢鉄橋

井川線は、人跡未踏の地に断崖絶壁を縫うように敷設していくもので、まさに岩と水との戦いで筆舌に尽くしがたい難工事であった。

関の沢川にかかる関の沢鉄橋は、大井川最大の渓谷接阻峽にあり、橋長114m、河底からの高さは日本一で70.8mある。

「参考」大井川鉄道

大井川の上流の木材、旅客、電源開発の貨物輸送などを目的に、1918(大正7)年、駿府鉄道(株)が静岡～千頭間の建設目論見書を申請した。しかしこの事業がスムーズに進まないで、1922(大正11)年に地元金谷町の有力者が設立発起人会を開き、社長に中村円一郎が就任した。そして大井川鉄道(株)に改称、ルートを金谷～千頭間に変更し建設工事を始め、難工事を経て1931(昭和6)年に金谷～千頭間(39.5km)が全通した。

その後、昭和10年に大井川電力(株)の専用



鉄道として千頭～大井川発電所間で運行開始、1954(昭和29)年、中部電力(株)の専用鉄道として大井川ダム～堂平間(井川駅の先で現在廃止)の運行を始めた。電源開発が一段落した後の1959(昭和34)年、中部電力専用線を大井川鉄道が引継ぎ、大井川鉄道井川線として旅客営業を開始した。

このように大井川鉄道は金谷駅から千頭に至る大井川本線と、千頭から井川に至る井

川線よりなる。その生い立ちはいずれも大井川の水力を利用した電源開発を大きな目的としたものであり、現在、地元住民の利用、地域活性化のためにS L列車の運転、井川線を南アルプスあぶとラインの愛称を付けるなど南アルプスを訪れる観光客の増加を図っている。

なお、三田民雄の簡単な略歴は次の通りである。

(寺澤 安正)

西暦	和暦	履 歴 内 容
1906	明治39	千三郎の4男として和歌山市で7月4日に生まれる
1929	昭和4	三河水力越戸発電所の工事現場に実習(井上五郎電気課長との出会い)
1930	昭和5	東京帝国大学工学部電気科卒業、東邦電力に入社(大卒一人入社)
1942	昭和17	中部配電株式会社に引継
1951	昭和26	中部電力理事、給電部長に就任
1953	昭和28	建設部長に就任
1954	昭和29	取締役役に就任(建設部長、企画部長を委嘱) 電力中央研究所理事長・松永安左衛門に随行し欧米視察 ①9月22日一羽田 ②英国・ロンドン(6日まで) ③スウェーデン・ストックホルム ④ドイツ ⑤イタリア(ローマ、フローレンス) ⑦フランス・パリーアメリカへ ⑧クイーンエリザベス号でニューヨーク、ロスアンゼルス(12月1日松永翁の誕生) ⑨ロスアンゼルスー ホノルル(12月8日) 一12月12日一羽田 電気主任技術者検定委員に就任
1956	昭和31	常務取締役に就任
1960	昭和35	中電ビル株式会社取締役、清水共同発電株式会社社長に就任
1961	昭和36	取締役副社長に就任
1962	昭和37	赤石観光開発株式会社取締役社長に就任
1963	昭和38	日本原子力産業会議が原子力発電調査団を派遣 副団長として欧米諸国の原子力発電の実態調査 電気事業関係功労者として藍綬褒章受章 電気協同研究会理事に就任
1964	昭和39	原子力安全研究協会理事に就任 産業構造審議会委員に就任
1965	昭和40	2月2日名古屋大学付属病院で死去 従五位勲四等に叙せられ瑞宝章を受く